

知的興味と学会の役割

Intellectual Interest and Role of MSJ

野田 紘憲 理化学研究所横浜研究所

K. Noda, Yokohama Institute, The Institute of Physical and Chemical Research

はじめに

最近、学会の役割や活性化について、学会役員の方々と話す機会が多い。年々正会員数と賛助会員の減少を心配し、その歯止め、さらには増加の対策としてである。そこで、このたび転職した機会に、長年、外資系企業に勤務し、いくつかの学会で微力ながら学会活動を行ってきた経験を踏まえて所感を述べる。現在、所属学会は8団体、すべて個人会員しかも個人負担である。このうち、日本応用磁気学会への入会が昭和52年で最も古く、以後、興味と業務により、順次ほかの学会に入会した。通常、学会への入会の動機は業務あるいは論文発表が大半と思われる。この興味で学会に入会するという動機について、学会の役割ひいては学会の活性化に関係しているので紹介する。

学会への入会動機

元々、自身の学会への入会の動機としては、その技術分野でどのようなことが、だれによって議論されているのか知りたく、先ず情報収集が第一の目的であった。したがって、第一に学会誌購読を行った。次に、論文発表の欲求や要求が出てきた。そこで、より活発に研究会や学術講演会に参加するようになった。また、これらに参加するにつれて、学会役員や参加者と知り合いになり、委員や役員あるいは国際・国内会議の実行委員を仰せつかってきた。

日本応用磁気学会への入会の動機は、日本IBMに入社してまもなく、14インチ磁気ディスクドライブしかもヘッドを超大型ボイスコイルモータで駆動する製品を担当したことによる。このボイスコイルモータ駆動源であるALNICO磁石の着磁器設計が磁気とのかかわり合いのはじめであった。それまで制御や電子回路設計に携わってきた者にとって、全く新しい分野であった。そこで、近角聡信先生の「磁気」や「強磁性体の物理」をはじめ多くの磁気関係の参考書や文献を読んだ。しかし、まだ学会のことはよく知らなかった。その後、種々のディスクドライブを担当するにつれて、磁気と記録をさらに知りたいとの欲求が強くなり、日本応用磁気学会に個人会員として入会した。次に入会した学会は電子情報通信学会であった。この動機は磁気記録研究会に参加したいと思ったからであった。その後、米国カリフォルニア州シリコンバレーにある

IBM San Joseに出張の折、友人の家に招待されたとき、*IEEE Spectrum*誌が置いてあった。たいへん興味ある雑誌であり貰ってきた。内容は学会誌であるが、論文誌ではなく、いわゆる技術雑誌であった。当時、一度も論文投稿したことがない者にとって、海外の学会入会は敷居が高かった。その後、東京インターマグ開催時にIEEE Magnetics Societyに入会し、また、後に同Computer Societyの会員にもなった。この*Spectrum*誌は、現在も私の愛読書の一つである。その後、国内のいくつかの学会に入会した。最後に、昨年入会した学会は応用物理学会であった。この動機は、まず講演会などに参加したかったためだが、現在の職場に入る前に必要性を痛感したためでもある。

IBMでは、学会への入会や活動は通常は業務命令ではなく、個人の意思と力量により行う。したがって、個人会員の年会費は個人負担である。グローバル企業であるIBMでは、各国の研究所に種々の学会や業界団体の重鎮がいて、IBMの顔として活躍している。また、業務が変わっても、しばらく学会役員や国内外会議の実行委員を行っている人が多い。この理由として、個人の意思を尊重する社風があるためだと思う。会社も会議登録費や交通費を支払うなどの支援をしている。私自身、業務が変わるにつれて所属学会を増やし、また退会せずに、ほとんどの学会に留まった理由として、知的興味が入会の第一動機であるものの、海外IBMの人々の学会活動の影響を受けているところが大きい。

学会の役割

ところで、いくつかの学会誌の内容を比較した場合、二つに大別される。一つは、学会誌イコール論文誌かつ高い専門性をもった記事が満載されているもの、もう一つは、学会誌はいわゆる会員誌で、技術トピックスが中心であり、論文誌は別冊になっているもの、である。前者は日本応用磁気学会誌が筆頭であり、後者は、電子情報通信学会誌、情報処理学会誌、電気学会誌、日本機械学会誌、応用物理学会誌、*IEEE Spectrum*誌などである。特に、後者の諸誌は私の知的興味をわかせてくれるのに十分であり、現在、大学の講義資料作成にたいへん役立っている。

ここで、本学会に気楽に入会でき、業務が変わっても退会せずに学会に留まることができる雰囲気、つまり、アッ

トホームな学会にするための一助として、二つ提案したい。一つ目は、財政面や編集委員の多大な労力など問題はあるにせよ、論文誌と学会誌いわゆる会員誌を完全に分けて発行することを検討しては、と思う。二つ目は、非会員や元会員にも学術講演会などへの参加や論文投稿の機会を与えては、と思う。これらによって、新たに会員になる方々やいったん退会した方々に身近な学会と感じていただけるのでは、と思う。

もう一つ経験を紹介したい。最近、IBM から理化学研究所に転職し、かつ主たる業務が磁気記録からプロテオミクスの自動化装置技術開発となった。この中で高度の自動化を目指しているが、例えば、Micro Electro Mechanical Systems (MEMS) や磁性微粒子をプロテオミクスに適用できないか、新たな展開として検討している。しかし、本学会の専門領域を見た場合、生体磁気、磁気医療応用などあるものの、磁性材料や記録などが学会誌や学術講演会の多くを占めており、いささか場違いの感がある。このような学際的なテーマを、本学会で積極的に取り上げ、関連学会からの会員を獲得できるようにすることを早急に検討しては、と思う。

また、磁気関係の職場に他分野から移ってきた人には、直ちに入会の勧誘をしよう。

おわりに

以上、自分自身の経験を中心に学会とのかかわりを紹介

した。まずは知的興味を満たすために、学会に入会したことは非常に良かった。入会以来、特に、日本応用磁気学会、日本学術振興会磁気記録第 144 委員会、電子情報通信学会、IEEE Magnetics Society では多くの方々と知り合い、ご指導をいただいた。学会を通じてのヒューマンネットワークは私の財産である。知的興味は研究者、技術者の動機づけであり、エネルギー源であり、さらなる成長につながるものと確信している。本稿が、特に、新たに学会に入会しようかどうか迷っている方々の参考になり、入会することになれば幸いである。日本応用磁気学会誌が学会活動スタートのトリガーになり、また *IEEE Spectrum* 誌が海外の学会への橋渡しをしてくれたことに感謝しつつ筆をおきたい。

(2002 年 9 月 11 日受理)



野田紘憲 のだ こうき

昭 42 東京都立大学工学部電気工学科卒、
昭 44 日本 IBM 入社、平 10 博士(工学)
(東京工業大学)、平 14 理化学研究所入
所、現在に至る。
専門 磁気記録、制御、MEMS (工博)